

浮世の成立

竹岡, 勝也

<https://doi.org/10.15017/2341038>

出版情報 : 史淵. 15, pp. 22-44, 1937-03-30. 九州帝国大学法文学部
バージョン :
権利関係 :



浮世の成立

竹岡勝也

一

近世文化の一つの性格を規定する浮世なる言葉の成立に就ての一つの考察である。先づその發生であるが、この浮世なる言葉は、如何なる關係に依つて我國に發生したものであるか。浮世なる言葉に依つて表現せらるべき思想の發生は遠く萬葉の時代、或は聖德太子の時代に迄も遡る事が出来る。これを萬葉に求めるならば、こゝに於てはしばしば神である事の出来ない現身の運命としての無常が歌はれて居る事を見るであらう。例へば人麿は吉備津采女の死に對して、「栲繩の長き命を、露こそは、朝に置きて夕は消ゆと言へ、霧こそは、夕に立ちて朝は失すと言へ云々」と、朝霧の如、夕霧の如、はかなく消えた若き采女の死を悲しんで居り、家持はまた亡妾を悲しんで、「うつせみの代は常なしと知るものを、秋風寒みしぬびつるかも」と、人の世の無常を歌つて居る。人の世の無常を悲しむ、それは必ずしも佛教の影響とする

必要はないであらう。神ならぬ現身の人間としての自覺に到達した萬葉の歌人に取つて、人の死の經驗に伴つて、自ら一種の無常觀に到り着く事もあり得たであらう。併しなから佛教はこの無常と對立した常住の世界を示して呉れた。そしてこの常住の世界と對立した關係に於て、一層強く人の世の無常が意識せられ、一層重大な意味に於て、この無常觀が我國の文化に作用して來ると云ふ關係は承認されなければならない。同時にこの場合には、例へば天壽國曼荼羅の緣起に於ける橘大郎女の言葉、「世間虛假、唯佛是真」に見られるが如く、假りの世の觀念を伴つて來て居る事は注目されなければならないであらう。

かくの如く浮世なる言葉の一つの内容をなす無常觀の發生は、極めて遠いものがあつた。併しながらこ

(註)

の時未だ浮世なる言葉が發生しては居なかつた。恐らくこの言葉は浮世^(註)、或は浮生として、漢詩と共に支那から傳へられたものではなかつたかと考へられる。例へば和漢朗詠集には、「欲以浮世期後會云々」と云ふ菅某の詩があり、本朝無題詩には、「浮世榮華知漸少云々」と云ふ菅原在良の詩があつて、この關係を窺はしめるものがある。併しながら一度これがうき世と訓ぜられるに及んで、それはまた新に憂き世として現れて來ることが出來たのであつた。そして浮世を憂き世に導く關係としては、矢張り平安末期の世相、中にも淨土思想の發達と、これに伴ふ出家の流行とを擧げることが出來るであらう。往生要集に依れば、人道には一に不淨の相があり、二に苦の相があり、三に無常の相がある。しかもそれは厭離せらるべき穢土であつて、百福嚴淨の淨土と對立して居る。平安末期の社會は一面かくの如き思想を胚胎した。そして穢土としてのこの世の經驗に破れた人々は、往生淨土を求めて出家すると云ふ現象も頻々として現れ

て來た。そしてかくの如き社會を母胎とした文學に於て、うき世が新に憂き世として更生して來る事あるは極めて當然であつた。寧ろかくの如き關係に於て、うき世なる言葉は、初めて我國の文學に誕生したと云はれる事も出来るのであつた。この時代の文學を辿るならば、しば／＼この意味に於けるうき世なる言葉に逢着する事が出来るであらう。例へば西行の山家集を開いて見る。そこには先づ「憂き世には留め置かじと春風の、散らすは花を惜むなりけり」或はまた「諸共に我をも具して散りね花、憂き世を厭ふ心ある身ぞ」と云ふが如き歌を求める事が出来る。即ち憂き世とは厭離せらるべきこの世の意味であつて、しかも散る花と共にこれを厭離する事を求める心が伴つて來て居る。更に他の場合を求めるならば、また「捨てゝ往にし憂き世に月の澄まであれな、さらば心の留らざらまし」或は世を遁れて伊勢の方へまかりけるに鈴鹿山にて」として、「鈴鹿山憂き世をよそに振り捨てゝ、如何に成り行く我身なるらん」とある歌を見る事が出来る。こゝに憂き世と呼ばれるものは、矢張り厭離せらるべきこの世の範圍を脱するものではないが、その中にあつて更に出家の世界と對立した世俗の世界、出家の原因を胚胎した世俗の世界を意味して居る。そこに於ては夫婦の關係が營まれ、子に對する恩愛の感情に繋がれ、或は朝廷に仕へて官位の榮進が求められて居る。これを女の立場から見ならば、蜻蛉日記の作者に於けるが如く、多くの妻の一人としての悩みを経験し、或は薄雲の女院の如く、運命的とも云はるべき戀愛の追求から免れる事のない世界である事も出来たであらう。この世俗の世界に於ける營みの経験は、しば／＼出家の原因としてその世界に作用した。その結果世を捨てゝ、或は世を遁れると稱する多くの出家が現れて來たのである

が、この場合に彼等が遁れ、或は捨てた處の世俗の世界は憂き世として考へられた。

註、李白 浮生若夢 爲幾何

杜甫 是非何處定 高枕笑浮生

李涉 終日昏昏醉夢間 忽聞春盡強登山 因過竹院逢僧話 又得浮生半日閑

李商隱 浮世本來多聚散

二

憂き世なる言葉は、以上の如き意味に於て、平安中期以後の文學に誕生した。その内容を決定するものは佛教的世界觀、佛教的人生觀であつて、或は苦として、無常として、不淨として、或はまた無我として經驗されるこの世であり、それはまた「よどみに浮ぶうたかた」として、或は「春の夜の夢」として表現される事も出来るものであつた。必ずしも淨土教と限つた問題ではないが、厭離穢土の思想が作用する事に依つて、一層憂き世の意識を明瞭にし、その言葉の響きを高めた事は争はれないであらう。そしてかくして發生したうき世なる言葉は、この後長く我國の文學に愛用せられ、やがて近世に迄送られて来る。併しながらこれが近世に送られて來ると共に、その意味にまた著しい變化が現れて來て居る事は注目されなければならなかつた。同時に文學の上に於ても、それは憂ひの世ではなくして浮いた世となり、再び漢詩の時代に立ち歸つて居る。然らば憂き世が浮世に置き換へられる事に依つて、このうき世なる言葉の意味に如何なる變化が現れて來て居るのであるか。また如何にしてかくの如き變化が行はれるに至つたのであ

るか。この問題に於て、先づ顧られなければならないものは室町時代の世相である。そしてこの室町時代の世相なるものには、鎌倉幕府が崩壊し、鎌倉幕府に依つて統制された武家社會が一度解體した建武の中興に迄遡つて、其發端が究められなければならないものがあつた。この建武の中興は、政治的に極めて重大な意味を持つと共に、社會的にも、武家社會の統制が紊れた事に依つて、著しい動搖がこれに伴つて來た。そしてこの社會の動搖に伴つて、こゝに新なる世相が展開して來るのであるが、この世相を窺ふ史料として、歴史家の間に珍重されて來て居るものに、建武年間記が收める處の二條河原の落書なるものがあつた。是に依つて見るも、俄貴族、俄大名、俄武士、統制が紊れた社會は、かくの如く俄と呼ばれる成上り者の發生を可能ならしめ、この成上り者の發生に依つて、社會はいよゝゝ混亂しなければならぬ状態に置かれて居た。必ずしも階級丈の問題ではなかつた。こゝにはまた「生頸還俗自由出家」、「浮かれて歩く色好」、「人の妻共のうかれ女は」、「在々所々の歌連歌」、「自由狼籍世界也」と云ふが如き言葉も求められる。即ちそれは古き傳統と秩序とが失はれた自由狼籍世界であつて、しかも其自由狼籍世界は、新なる秩序を恢復するには至らずして、間もなく吉野朝の戰亂時代に移される。そしてこの戰亂の中に基を開いた室町時代であるが故に、この時代の世相文化には、色々の意味に於て注目されなければならない現象が現れて來た。例へばこゝに、矢張りその發端の地位に位するものとして、建武の頃、吉田の兼好に依つて記された徒然草を顧るならば何うであるか。「文てふものはいさゝかもなし」と、近世國學者に依つて概括された中世文學の中にあつて、徒然草の占める地位は極めて特異なものがあつた。單に是に關する多く

の註釋書が近世の社會に現れて來たと云ふ丈ではなしに、假名草子の時代から浮世草子の時代にかけて、近世文學に及ぼしたこの徒然草の影響は、閑却される事の出来ないものがあつた。近世文學との關係に於て、徒然草は、何故にかくの如き特殊の地位に置かれたのであるか。これには色々の理由があるであらうが、その極めて重大な一つの理由として、徒然草が持つ處の世俗性とも云はるべきものを擧げる事が出来るであらう。即ち兼好は出家ではあつたが、これを西行や長明に比較するならば、一層世俗を離れる事の出来ない出家であつた。吉野拾遺が語る處に依れば、兼好の出家は、「和歌の道に深くおぼし入らせ、御なさけのあさからせ給は」ぬものがあらせられた後宇多法皇の崩御が原因をなして居る。「せめてのやる方無さに、御後の世をもと思ひ給ふるまゝに、斯かる姿となり侍れども、露の命の消え難くて、斯からん世を目のあたりに見ることよ」と、袖を絞つたと云はれる兼好の言葉が、こゝに語られて居るのであつた。この後兼好は東國を漂泊ひ、一時木曾の山中に庵を結んで遁世の生活を送つた事もあつたが、矢張り吉野拾遺に依れば、そこに國の守の鷹狩に會ひ、そのあさましさを眺め、「こゝもまた憂き世なりけり外ながら、思ひしまゝの山里もがな」と打ち詠じて、再び故郷である京都に歸つて來た。そしてこゝに寧ろ歌人としての生活を續け、名聲甚だ高きものがあつた。従つて出家ではあるが、その生活は「寂しさも習ひにけりな山里に、訪ひ來る人の厭はるゝまで」と、兎に角訪ひ來る人の絶えない状態に置かれて居た事が見られる。そしてかくの如き寂しさの中にあつて、廻り來る世相を觀照し、思ひ浮ぶまゝを時々記したものが、即ちこの徒然草であつた。二條河原の落書が、この時代の世相の動きを、その動搖の中にあつて記

述べたものであるとするならば、徒然草は、これを觀照する自らの心を内から語らうとしたものである。そしてこゝに於いて、我々はしば／＼これを觀照する心の分裂を眺めなければならないのであつた。この意味に於いて、徒然草は矢張り二條河原の落書に依つて示される世相の動きの中から現れて來た文學であつた。

徒然草に於て、先づ第一に注目されるものは、彼の古典趣味とも云はれるものであつた。即ち「何事も古き世のみぞ慕はしき。今様は無下に卑しくこそ成り行くめれ」であつて、しかもこの言葉は更に「彼の木の道の工人の作れる美しき器物も、古代の形こそをかしと見ゆれ。文の詞などぞ昔の反古どもはいみじき。たゞ云ふ言葉も口惜しうこそ成りもて行くなれ」と續けられる。そして或は器物、或は言葉など、次第に上代の典雅な趣きが失はれて、無下に卑しき今様に變つて來て居るこの衰へた末の世に於いて、彼は「尙九重の神さびたる有様こそ世づかすめでたきものなれ」或はまた「すべて神の社こそ捨て難くなまめかしきものなれ」と語つて、こゝに古典の世界に憧るゝ彼の心のくつろぎを見出して居るのであつた。かくの如く何事も古き世をのみ慕ひ、古き世の面影をのみ懷しんで居る彼に取つて、「きつけぬ冠上の衣、持ちもならはぬ笏持ちて、内裡まじはり珍しや」と云はれるが如き當時の世相は、固より淺間しとも、恐しも云はれるものでなければならなかつたであらう。古典と今様とは、かくの如き意味に於て、明かに彼の心の中に對立して居た。併しながらこの對立は、必ずしも彼をして古典の世界を再現せんとする運動に迄馳り立てようとするものではなかつた。古典の世界は要するに古典の世界として眺めらるべきもので

あつて、必ずしも再現せらるべきものとして現實に働きかける力を持つものではなかつた。換言すれば、矢張り彼は遁世者としての立場に立つて、古典の世界に誘はれる自らの心を懷しんで居ると云ふ態度を脱する事が出来なかつたのである。即ち「獨り燈の下に書を廣げて、見ぬ世の人を友とすることを此上無う慰むわざなれ」であつて、要するにそれは古典趣味、追懷趣味と云ふ程度を脱するものではなかつた。従つてこゝには歴史を外に眺めるものゝ一つの自由があつた。

次に徒然草に於て著しく現れて來て居るものは、浮世の生活を否定する遁世思想であつた。即ち人生は飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にし有ればと稱せられ、要するに無常である事に於て、幻にも等しき存在でなければならなかつた。そしてこの幻の人生に於ては、所願は皆妄想であり、また「萬事は皆非なり。言ふに足らず、願ふに足らず」と云はれなければならないものであつた。しかもこの幻の中に於ける人間の生活を見るならば何うであるか。彼は次の如くこれを語つて居る。「蟻の如くに集まりて、東西に急ぎ南北に走る。貴きあり、賤しきあり、老ひたるあり、若きあり、行く處あり、歸る家あり、夕に寢て朝に起く。營む所何ぞや。生を貪り、利を求めて止む時無し。身を養ひて何事をか待つ。期する處唯老と死とに有り。その來ること速かにして、念々の間に留まらず。是を待つ間、何の樂みか有らん云々」。かくして彼はこの幻の中に、名利に溺れて先途の近き事を顧みず、徒らに生を貪り、利を求めて止む時なき、空しき人生の姿を眺めたのであつたが、然らば彼は如何にこの人生に處する道を求めたのであるか。彼は萬の事は頼むべからず、即ち勢ありとて頼むべからず、財多しとて頼むべからず云々と、人生に於ける一切の期待と

信賴とを放棄して、徒然佗ぶる出家の生活を求めたのであつた。然らば何故に彼は出家の生活を求めなければならなかつたのであるか。そこには固より佛の道を求めると云ふ態度がなかつたとは云はれないのであるが、彼の場合に於ては、それは極めて消極的なものである事を免れなかつた。即ち彼は自らの出家の生活に就て、次の如く語つて居る。「徒然佗ぶる人は如何なる心ならん。紛るゝ方無く、唯一人あるのみこそ好けれ。世に隨へば、心の外の塵に奪はれて惑ひ易く、人に交はれば、言葉餘所の聞きに隨ひてさながら心に有らず。人に戯れ、物に争ひ、一度は怨み、一度は喜ぶ。其事定れる事なし、分別妄りに起りて、得失止む時無し。惑ひの上に醉へり。醉の中に夢を成す。走りて忙はしく、恍れて忘れたる事、人皆かくの如し。未だ眞の道を知らずとも、縁を離れて身を靜かにし、事に與からずして心を安くせんこそ暫く樂しむとも云ひつべけれ」。即ち未だ眞の道を知らない、従つてこれを浮世に投ずれば浮世の諸縁に引かれて煩ひを持たなければならぬ心を、その煩ひから免れる事に依つて安靜ならしめるために浮世の諸縁を離れ、唯一人あるのみこそ好けれと云はれる出家の生活に移つて來て居るものである事が語られて居る。そしてそれは暫く樂しむとも云ひつべけれと云はれる生活であつて、必ずしもこゝに於ては佛道精進の生活が求められて居るとは云はれなかつた。罪業を身に感ずる者の生活ではなくして、寧ろ煩ひなき心の自由を樂しむための生活である。従つて彼は、時には「仇野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らでのみ住み果つる習ひならば、如何に物の哀れも無からん。世は定めなきこそいみじけれ」と、人生の無常を却つて物の哀れと眺める事の出来る心の餘裕を失はなかつた。要するに死に至る迄の人生を、浮世の諸縁

に煩はされず、心靜かに樂しむ事の出来る生活を彼は求めたのであつた。こゝに於ても彼は人生の外にあつて、人生を眺める者の心安さを持つて居た。

彼は燈の下に書をひろけて、見ぬ世の人を友とする條に於て、書は文選の衰れる卷々の次に、白氏文集、老子の語、南華の篇云々と語つて居る。彼が老莊の書に親んだ事は、これに依つても知られるのであるが、人生の外に悠遊する事を求める彼の態度には、この老莊の影響が少くなかつた事と考へられる。兎に角彼は一切の人事を否定し、浮世の諸縁から斷たれた無爲無欲の生活に於て、人生の大安樂境を見出したのであつたが、然らば彼は果してかくの如き境界に安住し、心の靜寂を樂しむ事が出来たのであるか。

徒然草が語る處に依れば、彼は必ずしもその世界に安住しては居なかつた。例へば「若き時は血氣内に餘り、心物に動きて情欲多し」と語り、是に對して、「老ひぬる人は精神衰へ、淡く疎かにして感じ動く所無し。心自ら靜かなれば無益の行爲を爲さず。身を助けて愁無く、人の煩ひ無からん事を思ふ云々」と寧ろ心靜かにして惑ひ少き老ひの境涯を樂しむ心を語つて居るのであるが、然るに一方世は定めなきこそいみじけれの條に於ては「住み果てぬ世に醜き姿を待ち得て何かはせん。命長ければ恥多し。長くとも四十に足らぬ程にて死なんこそ目安するべけれ」と、姿醜く恥多き老年の厭ふべき事を語つて居る。そしてこの老年を姿醜く恥多しと語る時、彼の心は已に彼の大安樂境を離れて、浮世の間に下つて來て居る事が見らなければならぬであらう。同様の關係は「妻と言ふ者こそ男の持つまじきものなれ」の條に於ても見る事が出来る。即ち「子など出て來て愛護き愛したる」人妻の厭はしさを語つた後に、彼は「男亡く

成りて後、尼に成りて年寄りたる有様、亡き跡まであさまし」と、こゝに於ても老ひの醜さ、淺間しさに對して、自らの神經を尖らして居る。然らば以上の言葉は、この場合に彼が如何なる立場に立脚して居る事を語るものであるか。子にかしづく人妻を心憂しと云ひ、年老ひたる尼をあさましと見る彼の立場に於ては、矢張り浮世の女が、浮世の女として問題とされて居る。殊にこの場合に於て、彼は人妻ではない、従つて子にかしづく事もなく、年老ひたる尼でもない女、即ち好き女との戀を、それも「假初に來て泊り居などせんは珍しかりぬべし」と云はれる戀のあはれを問題として居る。好き女を戀の對象として見る彼の立場は、矢張り浮世のものでなければならぬであらう。

今一つこの關係は、武藝學問等に就ても見る事が出来る。即ち武に對して、「人倫に遠く禽獸に近き學動、其家に有らずば好みて益無き事なり」と語り、或は學問に對して、「生活、人事、技能、學問等の諸縁を止めよとこそ摩訶止觀にも侍れ」と語る時、彼は一切の人事を否定する出家の立場に立つて居るとも云はれるであらう。然るに彼はまた、時には「人の才能は文明かにして聖の教を知れるを第一とす。次には手書く事、旨とする事はなくとも是を習ふべし。學問に便り有らん爲めなり。次に醫術を習ふべし。身を養ひ、人を助け、忠孝の務めも醫に有らずは有るべからず。次に弓射、馬に乗る事、六藝に出だせり。必ず是を窺ふべし。文武醫の道、眞に缺けてはあるべからず云々」と語る事も出来るのであつた。この時には已に前の立場は放棄せられ、再び彼は浮世に下つて來て居る事が見られなければならない。そして浮世の人としての彼は、「物の哀れは秋こそ増されと人毎に云ふめれど、それも然る物にて、今一際心も浮

き立つ物は春の景色にこそ有めれ」と語る處の彼であつた。或はまた「何處にも有れ暫し旅立ちたるこそ目覺むる心地すれ。其邊り此處彼處見歩き、田舎びたる所、山里などはいと目馴れぬ事のみぞ多かる」と語つて、諸國の旅を楽しんで居る彼であつた。「靜かに思へば萬づに過ぎにし方の戀しさのみぞせん方無き」と語つて、彼は人靜まりて後、長き夜のすさびに、亡き人の手習ひ、繪かきすさびたるもの等取り出で、亡き人との浮世の思ひ出を懷かしんで居るが、彼の心に明滅する浮世の面影は、必ずしも亡き人との思ひ出丈には限られて居なかつた。彼の出家の生活は寒巖枯木の如き荒涼たるものでもなければ、また心の佛性が澄み登ると云ふ生活でもなかつた。到底彼は、彼の所謂大安樂境に安住し得たものとは考へられないのである。

かくの如く、彼は一面に於て歴史と人生との外に自らの出家の生活を求めて居るが、同時にまた浮世の人として浮世の生活を眺める立場を持つて居た。固よりこの二つの立場には、互ひに相容れる事の出来なないものがあるには相違ない。然るに徒然草に依つて窺はれる彼は、必ずしもこの矛盾に苦しみ悩む彼ではなかつた。西行の場合に於ても、「然らぬだに浮かれて物を思ふ身の心を誘ふ秋の夜の月」であつて、憂き世は矢張り出家した西行に附き纏つて居る。或は憂き世の思ひ出を、或は憂き世に誘はれる心を、彼はしばしば歌はなければならなかつたのであるが、これを歌ふ彼の立場は、常に憂き世から脱離する事を求める出家の立場に置かれて居た。従つて憂き世の思ひ出を、また憂き世に誘はれる心を、彼は悩みとしてこれを経験した。そのために憂き世は一層憂き世であり、またその憂き世から脱離する事を求める彼の心

には、一つの必然性があつたとも云はれるのであるが、徒然草に於ては、この點に於て西行とは著しい相違が見られなければならないかつた。即ち西行が經驗した悩みは、こゝに於いては殆んど問題とされて居ない。そしてこの悩みを取り去る事に依つて、西行の場合にあつては一つであつた立場が二つに分裂した。そしてこの分裂に伴つて、何故に彼は出家の生活を續けなければならなかつたかと云ふ新なる問題がこゝに起つて来る。即ち浮世の無常を感じて出家した彼が世は定めなきこそいみじけれと語る時、しかも無常をいみじと見る理由が、早く淨土に往生する事を求める處にあるのではなくして、「醜き姿を待ち得て何かはせん」と語られる事にあつたとするならば、彼の出家の理由なるものは、甚しく動搖して來て居る事が見られなければならないであらう。この時新に彼に與へられたものは老莊の思想であつた。そしてこの老莊の思想は、己にその根底が動搖して來て居る彼の出家の生活に、兎に角一つの理由を加へて呉れる事が出來た。併しながらこゝに至れば、彼の出家の生活なるものは浮世の無常を感じ、或は死後の成佛を、或は往生淨土を求める出家の生活とは、著しくその性質を異にしなければならぬ。そして彼は浮世の諸縁から放たれた無爲無欲の生活に於て、心の安樂と、靜寂の興趣とを求め得たにしても、こゝには必ずしもそこに止まらなければならないと云ふ理由はなかつた。従つて彼は比較的自由に、時には自らを浮世の人の立場に於て、心の赴くまゝに浮世を眺め、また浮世を楽しむ事が出來たのではなかつたか。生活の形式、また思考の形式に於て、彼は矢張り平安朝以來の傳統に支配されなければならなかつたのであるが、その形式は漸く權威を失つて、新に心に浮ぶ浮世の姿が問題とならなければならなくなつて來た。こゝに思想

の統一を求めるに先立つて、先づ靜かに自らの心の赴く處を眺め、時々その心の姿を語つて居る徒然草の如き文學が現れて來たのではなかつたか。

兎に角徒然草は、歴史的にこれを見るならば、以上の如き地位を占める事が出来るであらう。従つて矢張り出家文學には相違ないが、これには著しく浮世の香ひが加へられて來た。しかも彼がこの浮世に於いて、特に問題としなければならなかつたものは色の浮世であつた。即ち彼は「人の樂欲する所、一には名なり、二には色欲、三には味ひなり。萬づの願ひ、此の三つには如かず」と語つて居るが、中にも色欲に就ては、「眞の愛着の道、其根深く源遠し。六塵の樂欲多しと雖、皆厭離しつべし。其中に唯だ彼の惑ひの一つ、止め難きのみぞ、老ひたるも、若きも、智あるも、愚かなるも變る所なしとぞ見ゆる」と稱して如何にその厭離し難きものであるかを語つて居る。そして彼は、この色の世界に對して、「恐るべく慎しむべきはこの惑ひなり」と語り、また「世の人の心惑はすこと色欲には如かず。人の心は愚かなるものかな」と語る立場を失つては居なかつたが、一面に於て、彼自ら矢張り久米の仙人と共に「物洗ふ女の脛の白き」或はまた「手、足、膚などの清らかに肥え膏づきたらん」と云はれる女の幻影から免れる事が出来なかつたらしい。唯官能的な肉體の誘惑と云ふ丈ではなかつた。同時に假初の宿の好き女に戀のあはれを求める彼であつた。然らば彼は如何にかくの如き自らの心を反省したのであるか。時には彼は、「人の心は愚かなるものかな」と語る事もあつたであらう。併しながら時にはまた、「萬づにいみじくとも、色好まざらん男はいと肅々しく、玉の唇のそこなき心地ぞすべき」と語る事もあつたのである。「何事も古き

世のみぞ慕はしき」と語つて、現實をはなれた古き世の姿に憧れて居る彼、色の惑ひの根深さを身に感じ好き女との戀のあはれに恍惚として心誘はれる彼、殊に春の景色に浮き立つ心を感じ、しかも「花は盛りには月は隈無きをのみ見るものかは」と語つて居る彼、かくして彼は出家の生活を續けながらも、一面矢張りこの時代の歌論に於て問題とせられ、やがて世阿彌の能樂論に迄發展して行く、幽玄の世界を創造して居たとも見られるであらう。何れにするも彼の出家の生活は、古き傳統に支配されては居るが、已にこれを支へる根底に動搖を來たし、その立場は分裂して、新に浮世の諸相が彼に依つて眺められて來た。そして今一度彼の世界が動搖する時、世は定めなきこそいみじけれと云はれるその短き人生を、色の世界としてこれを享樂すると云ふ思想が現れて來る事ないとは限らないであらう。徒然草は確かに一面かくの如き思想を導く事の出来る性質を持つて居た。そしてこの思想は、徐ろに室町時代を通じて育まれて來て居る事が見られるのであつた。

三

室町時代の社會には二つの力が作用して居た事が見られる。一つは幕府の權力に依つて一切の勢力を統制せんとする中央集權的な作用であり、次は地方に勃興した新なる勢力が、この幕府の統制から離れ、互ひに獨立せんとする分權的な作用であつた。この二つの關係は、更に地方の勢力に就ても見られるのであつて其ために社會はしばしば動搖し、その間に嘗つて二條河原の落書に見られた下剋上の意識はあらゆる

方面に亘つて擡頭して來て居る事が見られるのである。この關係はこの時代の文化に就ても見られるであらう。即ち幕府は京都に開かれたために、武家は漸く京都風、公家風とも云はれる處の文化に接觸し、平安朝文化の傳統を繼承して、兎に角武家中心の文化がこゝに發展して來て居る事を見るのであるが、一面に於て、元來民衆と深き關係に置かれて來た武家中心の文化であつたために、一つには下剋上の意識がこれに作用する事に依つて、この時代の文化にはまた多量に民衆的な要素が加へられて來て居る。そして新に謡曲の如き文學が發生し、また小歌の如きものも傳へられるに至つたのであるが、是等の文學を通じて見るならば、この時代はまたしばしば浮世なる言葉が使用された時代であつた。しかも平安朝や鎌倉時代に比較して、この時代の世相は著しく變つて來て居ると同様に、この浮世なる言葉の意味、或は浮世に對する態度に於ても、自ら著しい變化が現れて來なければならなかつた事が見られるのである。固よりこれに於ても、浮世なる言葉には一種の無常觀が伴つて居る。併しながらこの無常觀が、如何なる性質の思想と結合し得るかに就ては、已に徒然草の場合に於て見る處あつた。以下暫らくこの時代の文學に就て、これに使用されて居る浮世なる言葉を検討して見なければならぬ。

先づ謡曲であるが、この謡曲には、極めて多くの場合に於いて、浮世なる言葉が使用されて居る事を見る。そしてそれは定めなき浮世、つれなき浮世、即ち矢張り厭世的な思想がこれに伴つて來て居る事を見なければならぬが、唯その浮世の中に眺められて居る情景、同時にその情景を包む浮世の性質に就ては注目されなければならないものがあつた。これを二三の例に就て窺つて見るに、先づ一つの例として、こ

ゝに松風を擧げる事が出来るであらう。松風は行平中納言と、松風、村雨と稱する二人の海人乙女との話、中にも行平中納言を偲ぶ松風の戀の狂亂を取扱つた謡曲である。そしてこの謡曲の初めには、思ひに沈む二人の海人乙女の幽霊が、汐波車を曳いて、須磨の浦に月の出汐を汲む情景が描寫されて居る。この情景の中に於て、先づ「汐波車あづかなる、うき世にめぐるはかなさよ」と歌はれ、續いて「實にや浮世の業ながら、殊につたなき海人小舟の、わたりかねたる夢の世に、住むとや云はんうたかたの、汐波車よるべなき、身は蜚人の袖ともに、思を乾さぬ心かな」と云ふ言葉が現れて来る。こゝに問題となつて来るものは、矢張りうたかたとも、夢とも云はれる處のはかなき浮世である。併しながらその浮世の中に眺められて居るものは、「殊につたなき海人小舟の」、即ち浮世の業としての海人乙女の生活であり、しかもその海人乙女は、浮世の戀を求める事に依つて、一層よるべなきものとして語られる。矢張り永遠の世界との對立が、この浮世なる言葉の要素をなして居るには相違ないが、それは必ずしもこれを厭離し、或は脱離すべき理由として、この浮世に作用して居るものではなかつた。換言すればこれを厭離し、或は脱離すべき關係に於て、初めて人生は浮世として眺められて来るのではなくして、浮世を眺める立場が新に浮世の中に於て求められ、従つてこゝに繪卷物の如くに浮世の諸相が展開されて來ると云ふ關係が認められなければならない。そしてその繪卷物の中に於ける一つの情景として、浮世を渡りかねて居る海人乙女のつたなき生活、しかもその海人乙女のはかなき戀の嘆きが語られて居るのであつた。眺められるものは矢張り世俗の世界ではあるが、これを眺める立場が、出家の世界から同じ浮世に移動して來て居る事に於い

て、自ら浮世なる言葉が持つ意味に、一つの變化が現れて來て居ることが見られなければならないであらう。この關係は次の室君の場合に於ても見る事が出来る。即ちこゝに描寫されて居るものは「室の海、波ものどけき春の夜の、月のみふねに棹さして、霞む空はおもしろや」と歌はれる室の海の情景である。そして室の遊女達が、舟歌を歌ひ、神樂を行つて、加茂の明神を祭るのであるが、この時の言葉に「棹の歌うたふ浮世の一節を、々波千鳥聲をへて、友呼びかはすあま乙女、恨ぞまさる室君の」と云ふ一節がある。また江口には「うたへや歌へうたかたの、あはれ昔の戀しさを、今も遊女の舟遊び、世を渡る一節を、歌ひていざや遊ばん」とあつて、即ち遊女の舟歌は、浮世の一節であるとともにまた浮世を渡る一節でもあつて、こゝに於ては、戀も、恨みも、更に遊女の生活そのものも、要するに浮世の一節として眺められて居るのであつた。しかも「傳へ聞く唐土の莊子が、あだに見し夢の、胡蝶の姿現なき、浮世の中ぞあはれなる」と歌はれる胡蝶に於ては、またその現なき浮世の中に、「未だ花の都を見ず候ふ程に、此春思ひ立ち、都に上り、洛陽の名所舊跡をも一見せばやと思ひ候」と、花の都の名所舊跡が語られて居る。かくの如くはかなき浮世ではあるが、その浮世の繪巻物が、或は海人乙女の生活、或は遊女の生活、或はまた花の都の名所舊跡と展開されて來て居る事は、單に厭離せられ、或は脱離せらるべき浮世の意味に比較して、矢張り著しい相違であると云はれなければならないであらう。しかもこの時代に使用されて居る浮世なる言葉は、必ずしも以上の意味丈に止るものではなかつた。閑吟集を初め、室町時代の小歌集を開いて見るならば、謡曲の場合に比較して、一層自由にこの浮世なる言葉が使用せられ、またこの浮世なる言葉一つに

就て見るも、如何にこの時代は、世相の變化が著しい時代であつたかを知る事が出来るであらう。固よりこの場合に於ても、浮世と云ふ言葉の基調をなすものは夢の浮世の思想であつた。例へば「たゞ何事もかごとく、夢幻や水の泡、笹の葉に置く露の間に、味氣なの世や」と稱せられ、其他「浮世は風波の一葉」「夢さへ見果てぬ味氣なの浮世」「槿の花の上なる露の世」と云ふが如き言葉はしばしばこゝに現れて来る。併しながらこれを現實の問題として見るならば、如何にそれは夢の浮世ではあつても、要するにその夢の浮世を脱する事が出来ない約束の上に生活して居る人間である。かくの如き人間に取つて、浮世を假の世と觀じ、浮世の外に常住の世界を求める事も、確かに一つの道であるには相違ないが、この道が成立するためには、その常住の世界に對する信仰が前提をなさなければならぬ。この信仰が動搖する事あるならば、自らこの道は成立の理由を失はなければならぬのであつて、果してこの時代の一面に、以上の關係に基く思想の動搖を眺めなければならぬ場合があつた。即ちこゝに問題とされるものは、常住の世界ではなくして夢の浮世である。そしてその夢の浮世も、「夢のくくく、昨日は今日の古へ、今日は明日の昔」と云はれる唯今日の一日のみを頼む事の出来る人生であつて、かくの如く瞬間の生に、人生の意義が求められて來た事に依つて、矢張り夢の浮世ではあつても、その夢の浮世に對する態度に、著しい變化が現れて來なければならなかつた。例へばこゝに「くすむ人は見られぬ。夢のくくく世を現顔して」「何せうぞくすんで。一期は夢やたゞ狂へ」「かゝるはかなき夢の世を、現と住むぞ迷ひなる」、或はまた「よし名の立たば立て。身は限りありいつまでぞ」と云ふが如き小歌が擧げられるであらう。即ち夢の浮

世に於ける生の意義は、常住の世界にかゝるのではなくして、今日の一日にかゝつて居る。しかもそれは常住の世界から解放された今日の一日なるが故に、彼等はそこに、「一期は夢よたゞ狂へ」と云ふ生活を求める事も出来たのであつた。時にはまた、「兎角踊らにや氣が浮かぬ」と歌つて、「現と住むぞ迷ひなる」と悟つたこの浮世に、浮れ踊るものもあつたであらう。何れにするもこゝには新に解放された人間性の亂舞、それも夢の浮世なるが故にと云ふ極めて不安な根底の上に展開された人間性の亂舞が見られなければならない。従つてこゝにはまた「よし名は立たば立て」と云ふが如き、瞬間の興奮に身を委せる者の自由も求められた。かくして宗教的な、或は道德的な統制から解放された人間性が、夢の浮世なるが故にと云ふ中世的な傳統の中に、發酵し、亂舞した事は、この時代の著しい特色であつて、やがてその中から近世の歴史が發展して來ると云ふ關係も注目されなければならなかつた。併しながら彼等は單に永遠の世界から解放されたこの瞬間の人生に、心のまゝに亂舞すると云ふ丈の生活に止まつて居たとは云はれなかつた。彼等は矢張りその亂舞の中に於て、自らの心を反省した。そして夢の浮世に新なる生の意義を求めようとした。この時彼等が自らの心の中に求め得たものは情であつて、この情と對立した關係に置かれるものとして彼等は嘘を問題とした。先づ情に就て、彼等は次の如き小歌を歌つて居る。「たゞ人は情あれ。權の花の上なる露の世に」、「唯人は情あれ。夢のくく、昨日は今日の古へ。今日は明日の昔」、「情ならでは頼まず。身は數ならず」、「妻戸をきりゝと押し開く。御簾の追風匂ひ來る。人の心の奥深き、その情こそ都なれ」。即ちこゝに情と稱せられるものは、主に男女の情であつて、この戀の情に於てこそ浮世の意

義は求められ、またこの情こそは人の心の奥深き都であると歌はれたのであつた。かくして彼等は、夢の浮世に唯一つ頼むべきものとして情の生活を求めたのであつたが、併しながら一面に於て情は身の仇であつて、彼等が求めた情の生活は、しばしば破綻を來さなければならぬ場合があつた。その一つの理由として彼等は嘘の世と云ふ言葉を擧げて來る。「人は嘘にて暮らす世に、何ぞよ燕子が實相を談じ顔なる」、「獨り寢はするとも、嘘な人は嫌よ。心は盡いてせんやのう。世の中の嘘が去ねかし、嘘が」、「人の心は知られずや。眞實心は知られずや」。即ち彼等に取つて、浮世は色々の意味に於て嘘の浮世であつた。彼等が求める情の生活に於ても、故障をなすものはこの浮世の嘘であつた。かくして彼等は浮世の嘘を呪ひ、人の心の奥の情を開き、眞實心を求める事に依つて、新に浮世の生活を導かうとして居るのであるが、かくの如き浮世が、一面色の世界として發展して來る事あるは極めて當然であつて、しかもこれが「一期は夢よたゞ狂へ」と歌はれる態度と結合するならば、「十七八は二度候か。枯木に花が咲き候かよの」と云ふ、夢の浮世のその青春の一時を、色の享樂に送る事を求める歌が歌はれる事あるとしても別に不思議とするには足らなかつた。

兎に角この時代の文學の中にあつて、恐らく民衆の生活を母胎としたと考へられる小歌に於て、かくの如く色の浮世の思想が著しく現れて來て居る事は注目されなければならなかつた。固よりそれは小歌の世界であつた。如何なる場合に是等の小歌が歌はれたものであるかを考へる時に、それは要するに彼等の生活の一面の表現としての性質を脱し得ないと云ふ見解も成り立ち得るであらう。これを以て、この時代の

文化全般を規定し得るものでない事は云ふ迄もないのであるが、何れにするも、かくの如き小歌の世界が彼等の間に展開せられ、こゝに新なる世相の動きが眺められて來て居る事は争はれなかつた。そしてかくの如き意味に於て、この時代の世相が動いて來て居る事は、また浮世なる言葉に特殊な意味を加へて呉れた。即ち京傳や種彦等が考證して居る當世風、或は今様の意味であつて、その例としては狂言吟じ聲に於ける「聲殿は浮世人ぢやによつて」と云ふ言葉が挙げられる。浮世は何故に今様であり得るか。以上の如き世相の動きが、當世風、或は今様として迎へられて來て居る處に、初めてこの言葉は成立するとも見られるであらう。

かくの如く謡曲、小歌、或は狂言等を通じてこの浮世と云ふ言葉を検討するならば、徒然草以後矢張り世相の變化に伴つて、この言葉が持つ内容の上に著しい變化が行はれて來て居る事が見られなければならない。そしてかくの如き變化が行はれるに至つた重大な理由として、社會生活の不安、中にも下刺上の現象に伴ふ社會の混亂を擧げる事が出来るであらう。その社會の混亂が、或は一揆、或は戰爭の形に於て現れて來る場合も珍らしくはなかつた。浮世がこの戰爭に依つて一層夢の浮世として經驗せられ、また一層嘘の浮世としての性質が加へられ、時にはまたその浮世を享樂の世界に導いて來ると云ふ關係も考へられなければならないであらう。かくの如き傾向が、室町中期以後の社會に於て一層著しく現れて來る事あるのは當然であつた。しかもこの社會の混亂は遂に收集される事なくして、歴史は戰國時代に移されて行く。そしてこの戰國時代の社會こそは、正に夢の浮世が如實に經驗されて居る社會であつた。この時代に關す

る實錄物を見るならば、全く「昨日は今日の古へ、今日は明日の昔」であつて、頼むべきものは唯今日一日の浮世であると云はれる状態が展開されて来る。しかもこの間にあつて、父は夫の仇であり、夫は父の仇であると云ふ場合も珍らしくはなかつた。これを美濃國稻葉山の城主であつて、一時は「合戦の道に於ては近國無双の大將」と謳はれた齋藤道三に就て見るならば何うであるか。卑賤より身を起こした道三が稻葉山の城主として美濃國を領し、威を近國に振ふに至るためには、次の如き歌が歌はれなければならなかつた。「主を打ちむこを殺すは美濃尾張、昔は長田今は道三」（江濃記）。然るに其道三は、主家から奪つた愛妾の子義龍に攻められ、遂に惡運盡きて長良川の戦ひに敗死したと傳へられるのであるが、その死の前日、末子に、かねての約の如く京の妙覺寺に入り、佛道に歸すべき由を遺言した書狀が、今日に迄傳へられて來て居る。「其方事、如契約之京之妙覺寺へ被登尤候。一子出家、九族生天といへり。如此調候一筆、泪計。よしそれも夢云々」。即ち一代の英雄として一時花々しく活躍した道三が、その子のために襲はれ、死を眼前に眺めた時に、そしてその瞬間に於て、或は主家を逐ひ、その愛妾を奪ひ、しかも自らの女婦を殺した是迄の生涯を顧みた時に、その淺間しき死を以て、自らの罪業の報ひとしても感じられたであつたであらう。併しながら要するにそれも夢として、彼は泪を以てその夢を見送つて居る。これは道三の場合であるが、この時代の社會に生存した人々に取つて、それは必ずしも道三の場合にのみ限られた經驗であるとは云はれなかつたであらう。そしてかくの如き經驗を結果して居る戰國の時代を經過する事に依つて、初めて室町時代の思想は近世に送られて來る事が出來たのであつた（未完）。